第九話　術策と金力で獲得したもの

Boys, be ambitions！　青年たちよ！　大志を抱け!!　これはもう皆様ご承知の通り、故クラーク博士が札幌農学校を去るに際して日本の青年たちに残した遺言であります。青年たちはアンビシオンを……すなわち大志を持たねばならぬ。洋々たる未来を目指し、どんな偉大な人間にでもなり得るその可能性を内に宿して、青年たちの胸は果てしない希望に大きくふくらんでいなければならぬ、との博士の言葉は、真に日本の青年たちにとって貴重な遺言でありました。

過去を持たぬ青年、未来に生きる青年には夢がなければなりません。現代の日本の青年たちの中からこそ将来の日本を背負って立ち、日本の国に栄光をもたらす人材が輩出するはずなのですから。もしも、青年から夢を除いたなら、青年らしい若さは影を消しましょう。夢は若さの誇りであり、同時に、未だ世の汚れを知らぬ純真な熱情の印でもあります。

けれども、悲しいことには、若い人たちが、学業を終えて世間に出て、段々と年をとると共に、この夢は一つまた一つと破れ去り、かつて希望に大きくふくらんだ胸はむざんにしぼんで行

くのです。

現実はそんなに甘いものではなかった。結局、安月給に甘んじて生涯下積みの人生を送るのが自分の宿命なのだとあきらめる人々は、希望を失うかわりに、せめて悪賢い処世術と金もうけの知恵を取り入れて平凡な市井人の生活に入るか、あるいは、親から譲られた田畑を黙々と耕す代償として、お酒を飲んで「憂」さを晴らす術を覚えます。

そういう人々の中にあって、自分だけはあくまで若き日の夢を実現して見せると気負う人たちは、自分自身にこう言い聞かせるでしょう。

「純真な熱情だけでは、この偽り多い世の中にただ生きて行くことさえむつかしい。困難な生存競争に打ち勝って、自分の夢を実現させるためには、策略と陰謀とが必要なのだ」と。そして、いわゆる「蛇のごとき賢さ」をもって着々とおのが地歩を築き上げて行きます。けれど、一つ一つ地歩を固めながら実現して行くという夢は、若き日の、あの燃え立った純真な情熱が描いた夢とは、およそ似ても似つかぬゆがめられた醜い姿に変わり果てています。

総選挙の、あの騒擾の中で、全国の有権者諸君の前に突如として出現する「お辞儀をする機械たち」……青年たちが若い胸をふくらませて、政治家たらんと志したとき、その中のだれが、このような姿を夢見たでしょうか？

しかしやむを得ないのでしょうね。政治家になるためには、心にもない公約をどなりたて、未だかつてだれにも見せたことのない愛想笑いをほおに浮かべ、したこともないお辞儀を百万べんも繰り返す……それが処世の術なのでしょうから。

代議士当選三回ともなると、ソロソロ大臣病という病気にとりつかれます。そして組閣の前夜には自選他選の大臣病患者が、ただでさえあわただしい夜を一層あわただしいものにすることでしょう。かくて終戦後、おびただしい数に上る大臣が製作され、あわただしく大臣の椅子に上り、また下りて行きました。夏の海のうたかたのように、名もとどめず実も残さず消えて行ったことでした。

私は、選挙の度に思うのですが、国会議員といえば国民がその代言を頼んで議政壇上に送るものなのですから、「有権者の皆様、どうぞどうぞ私にご同情くださいまして清き一票を！」と候補の方から有権者に頭を下げて頼むような候補者ばかりでなく、有権者の方から、「どうぞ私たちのためにお願いします。」と候補者にお百度踏んで出てもらうような、そういう選挙が、たまには広い日本のどこかであってよさそうに思うのですが、そういうあたり前な話を、あまり聞くことがないのは全く不思議……と皆様はお思いにはなりませんか？

これはまた少し話が脱線したようです。話を元に戻しましょう。こういうわけで、青年の純真な夢は跡形もなく消え失せ、それが人生なのだという淋しいあきらめの一生を送るのが大部分なのでしょうが、ではいったい、なぜ、青年の夢は消えなければならない運命にあるのでしょうか？　私はこう考えるのです。

それは、クラーク博士の、「青年たちよ、大志を抱け！」との、あの「大志」という言葉の意味をはき違えているのではないか？　と。

たとえば、例を今お話しした政治家にとってみましょう。青年はまだ世の汚れに染まぬ清らかな目を開けて、現在の国のありさまを眺めます。その純真な瞳に映るものは、策謀とかけ引きとに終始する狡猾な処世術にたけた、いわゆるおとなの世界の矛盾です。よし、僕がおとなになったら……と青年の熱情は、そういう一切の社会悪や矛盾をこの世界から追放するすばらしい政治家になろうと決心します。それはりっぱな夢なので、この社会の矛盾を取り除くものがいつの日にか出現するとすれば、それは、こういう青年らしい熱情の持ち主の中からこそ出るはずだからです。けれども、青年の、その大志の中には、社会に奉仕しようという没我的な熱情と共に、その当然の報いとして、世間の賞讃と輝かしい脚光を浴びた自分自身の姿もある……と言えば、そんなことは当たり前だとおっしゃるでしょうか？　けれど、問題はそこにあるのです。太閤秀吉の処世訓であったと思いますが、自分がぞうり取りであった時には完全なぞうり取りになる。足

軽の時には、だれもまねのできないようなすぐれた足軽になる……というような言葉があります
ように、現在の自分の境遇の中で、最大限に自分を生かしつつ、自分の人間としての価値を内面
から高め深めて行くことを忘れて、ただ、外面だけにでき上がった権力の座に憧れるとき、その
ときから、青年の夢はくずれ始めるのです。そのときから人生の不幸が始まるのです。自分自身
にそれだけの価値もないのに、高い地位と人々の賞讃を追求するとき、どうしてもそこには、策
謀とかけ引きが必要になりましょう。かつての青年たちの中で、術策に長けたものが、外面的には、
若き日の夢を実現しているように見えますが、しかし、ふと気がつくとき、自分がかつて、若き
日の熱情をもって、あれほど憎みきらった、あのおとなのエゴイズムの世界に自分自身が跳梁し
ているみじめな姿を発見するでしょう。おとなの世界は依然として醜い権力争いの場であり、そ
して、今は、自分もその醜い争いの渦中に巻き込まれているのです。若き日の夢に政治家たらん
と志した、かつての青年が、そういう姿で、ついに憧れの議政壇上に立ったとき「ああ、私はつ
いに若き日の夢を実現した。」などとは、おこがましくも言ってほしくはありません。だれも、
君を尊敬してはいないのです。国民が君の前に頭を下げるのは、君が偉大であるからではなく、
君の持つ権力の前に、ぬかずくのです。いつか君が、その権力の座を追われるとき、国民は君の
名も覚えてはいないでしょう。

皆様、このことは、もちろんただ政治家ばかりではなく、あらゆる地位、あらゆる権力にも当
てはまるでしょう。自分自身の内面から高められた人間の価値に与えられた地位ではなく、ただ
術策と金の威力で獲得した地位は、また同じように、他人の策謀と金の力で奪い去られることが
できるものとさとらねばならないはずであり、その自覚と不安とにおびえ、せっかく得た地位を
奪われたくないと、更に策謀を弄することになり、醜い権力争いはますますその醜さを加えて行
くことになる……皆様、生きることの「しあわせ」とは……満ち足りた生命の喜びとは、そんな
ものではありません、などと言う必要もないでしょうね。権力、地位、名声、うたかたのような
名誉を求める生活は、私たちの人の世の命を更に更にゆがんだふしあわせな世界にするだけなの
だと見極わめることは、そうむつかしいことではないでしょうから。

一八一〇年でしたか、ナポレオンが夜陰に乗じてひそかにエルバ島を脱け出して、フランスに
進軍して来た時の模様をしるしたフランスの新聞ル・モニトールの記事が、一つのエピソードと
して伝えられています。

最初は「食人鬼、ひそかにその巣窟を脱出せり」と、その恐怖を伝えたル・モニトール紙は、
数日後には、ようやくナポレオンを人間扱いにして「暴君、リオンを通過、パリを去ること六〇
里の地点に進出」と、その口調を変えた後、今度は暴君が、本名のボナパルトとなって「ボナパ

ルト急速に前進を続けつつあり」。次に、いよいよパリ入城が確実となるや、ガラリと口調が変わって「ナポレオン、フォンテーヌブローにご到着」ということになりましたが、とうとう「皇帝陛下には忠実なる臣下を従え、昨日、チュイルリーに入御遊ばされた」ことになったという話です。

が、その皇帝陛下も、モスコー攻略で一敗地にまみれ、フランス国民からも見棄てられてセントヘレナに孤独な生涯を閉じたことはご承知の通りでありまして、これ以上駄足をつけ加える必要もないと思います。

ただお金もうけ、お金もうけと、必要以上の富を追いかけて朝から晩まで狂奔しながら、いっぱしの大事業家とうぬぼれている人々の生命が、その内面では、カラカラと渇き切ったうつろな響きを上げて空回りしているのと同様に、人間としての内面的な値打ちもなしに権力の座に憧れる人々の姿もまた、道化た猿芝居にも似て、私にはみじめなものに見えるのです。きのうはデパート、きょうはオペラと、孔雀のように美しく着飾った貴婦人の傲慢にふくれ上がった胸の中の、空洞を吹き抜ける冷たい風の音が私には聞こえるような気がするのです。

皆様、私たちが見い出さねばならぬ「しあわせ」という青い鳥は、富や権力や名声の中にはい

ないのです。けれど皆様、私たちのひとり残らずが、しあわせを求めるべく生まれながらに宿命づけられているということが真実なら……私たちすべての人間が、この生命の奥底に、どうしても打ち消すことのできない「しあわせへの憧れ」が根強く宿っているということがほんとうなら……どこかに、そう、どこかに、私たちのいのちを満たす「しあわせ」があるはずなのです。幸福の青い鳥を求めて、今しばし、心の遍歴を続けることにいたしましょう。

今夜は、どうやら、時間が来たようです。では、皆様、また来週のこの時間に。それまでどうぞ、ごきげんよう。さようなら。